

# 大阪都心部における開発年代の異なるパブリックスペースの空間特性に関する研究

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 村尾 駿  
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 武田 重昭  
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 加我 宏之  
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 増田 昇

## 1. 研究の背景と目的

近年、都心部では賑わいや魅力の向上を目指す取り組みが積極的に行われている<sup>1)</sup>。鳴海が「都市の魅力を感じることができるのは、「自由空間」を通じてなのである<sup>2)</sup>と述べているように、都市における賑わいや魅力の向上には、交流や情報発信など人々の様々なアクティビティを受け入れる場である「パブリックスペース」が非常に重要な役割を担う。都心部におけるパブリックスペースの既往研究としては、三浦ら<sup>3)</sup>の施設内公開スペースの空間構成を把握することで、それぞれのタイプに応じた街路との連続性が図られていることを明らかとしたものや、土田ら<sup>4)</sup>のプレイスメイキング実験により、利用者が好む休憩行為や待ち合わせ行為が行われる空間とその構成の関係を探り、行為によって好まれる空間構成が異なることを明らかとしたものなどがあるが、これらはパブリックスペースの空間構成の特徴を街路との連続性や待ち合わせといった行為との関係から捉えており、パブリックスペースの特性を地区全体での分布状況と空間構成の両面から捉えたものは見られない。また、パブリックスペースのあり方は時代ごとのニーズによって変化するものであり、その変遷を把握することは、今後の都心部における賑わいや魅力の向上に資するパブリックスペースの整備を考えていく上で重要であると考えられる。

そこで本研究では、現在も開発が進められている大阪都心部を対象に、開発年代の異なる3地区のパブリックスペースの空間特性を比較し、その変容を捉えることで、今後の都心部におけるパブリックスペースのあり方を探ることを目的とした。

## 2. 研究の方法

### 2-1. 調査対象地区の設定

本研究では、大阪都心部における開発年代の異なる大阪駅前ビル地区、オオサカガーデンシティ地区、グランフロント大阪地区の3地区を対象とした。大阪駅前ビル地区は大阪駅前第2次土地区画整理事業および大阪駅前市街地改造事業によって整備された地区であり、1981年に竣工している。オオサカガーデンシティ地区は西梅田土地区画整理事業および梅田2丁目土地区画整理事業によって整備された地区であり、2004年に竣工している。グランフロント大阪地区は大阪駅北大深東地区土地区画整理事業によって整備された地区であり、2013年に竣工している。

### 2-2. パブリックスペースの設定及び調査方法

本研究で対象とするパブリックスペースは、歩道や公開

空地、公園などの屋外空間に加え、商業施設内の共用通路やエントランスホールなどの屋内空間を含む「建築内外および公有私有地を問わずに不特定多数の人が自由に利用できる空間」と定義した。ただし、店舗内の通路やホテルのロビーなどの一事業者が管理する占有空間は対象から除外した。またパブリックスペースを形状によって、主に通行目的に利用される線形空間である「道型」、主に滞留目的に利用される面的広がりを持つ空間である「広場型」に分類した。また、地区外との回遊性によって、同一階において地区外と直接接続している、もしくは、共用通路や連絡通路などの地区外につながる通路に接続しているパブリックスペースを「回遊性あり」、地区外への直接的なアクセスが確保されていないパブリックスペースを「回遊性なし」に分類した。

調査では、グーグルマップや各地区のフロアマップからパブリックスペースを抽出し、各フロアのパブリックスペースの分布図を作成した。図-1は3地区の地上階のパブリックスペースの分布図を示している。パブリックスペースは上記の分類に従って道型と広場型、専用部と共用部、回遊性ありとなしに分類し、それぞれの面積を図上で計測した。また、現地調査によりパブリックスペース内に存在する修景スペースの種類と位置を把握し、修景スペースの分布図を作成した。なお修景スペースは植栽などの緑系、水盤やカスケードなどの水系、オープンカフェなどの施設系の3種類に分類し、それぞれの面積を計測した。また、パブリックスペース内に存在する着座施設の箇所数と位置をそれぞれ把握し、1人用、2~4人用、5人以上用の3つに分類して各階ごとに箇所数を集計した。

## 3. 対象地区のパブリックスペースの空間特性の比較

### 3-1. パブリックスペースの分布特性の比較

分布特性については各階のパブリックスペースの分布図より、各階ごとに回遊性のあるエリアと回遊性のないエリアを特定し、そのエリアの総床面積に占めるパブリックスペースの割合を、道型・広場型に分けて計測した。なお、各階の構成比は地下階と地上階および2階以上の上層階の3階層に分類して集計した。

図-2は地区全体の総床面積に占めるパブリックスペースの割合を道型・広場型の分類で、図-3は回遊性の有無の分類で示している。調査対象とした3地区におけるパブリックスペースの分布特性を道型・広場型の分類から見ると、大阪駅前ビル地区では地区全体の総床面積に占めるパブリックスペースの割合36.4%のうち、道型が34.2%と

大半を占めるのに対して、オオサカガーデンシティ地区では全体 33.3%のうち、道型が 24.9%、広場型が 8.3%となり、広場型が全体の約 1/4 を占める。グランフロント大阪地区では全体 29.7%のうち、道型が 20.1%、広場型が 9.7%と、広場型が全体の約 1/3 を占めており、大阪駅前ビル地区からグランフロント大阪地区と開発年代を経るほどに、広場型の割合が増加していることが分かる。回遊性の有無で見ると、大阪駅前ビル地区では、回遊性ありの割合は 27.5%、回遊性なしは 8.9%であり、オオサカガーデンシティ地区では、回遊性ありは 27.8%、回遊性なしが 5.5%、グランフロント大阪地区では、回遊性ありが 18.5%、回遊性なしが 11.2%となり、3 地区とも回遊性のあるパブリックスペースの割合が高い。

図-4 は回遊性のあるフロアの総床面積に対する回遊

性のあるパブリックスペースの割合を示している。回遊性のあるフロアにおけるパブリックスペースの割合を見ると、全体では 3 地区とも約 45%と大きな差はない。階層別にパブリックスペースの割合を見ると、地上階では 3 地区とも 50%以上と高い割合を有しているが、広場型の割合を見ると、大阪駅前ビル地区では 1%以下、オオサカガーデンシティ地区では約 20%、グランフロント大阪地区では約 30%となっており、オオサカガーデンシティ地区以降の年代では割合が急激に増加していることが分かる。地下階では大阪駅前ビル地区とオオサカガーデンシティ地区はいずれも約 35%を占めるのに対し、グランフロント大阪地区は約 25%とやや低くなっている。上層階では大阪駅前ビル地区に回遊性のあるパブリックスペースは見られないが、オオサカガーデンシティ地区およびグランフ

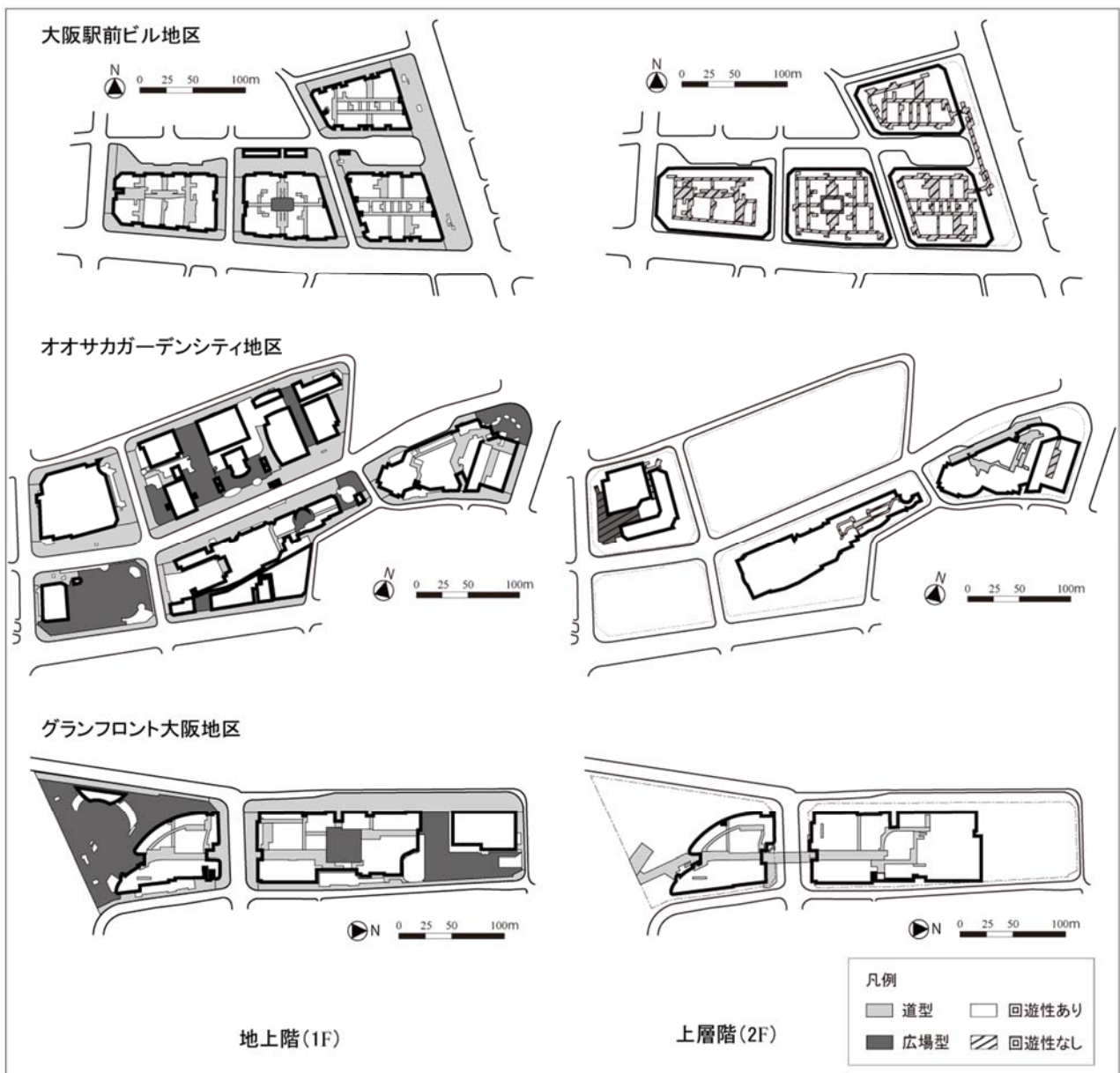


図-1 3地区のパブリックスペース分布図

ロント大阪地区には2階レベルに道型パブリックスペースが23.2%存在し、2階レベルでの回遊性が確保されていることが分かる。

### 3-2. パブリックスペースの空間構成の比較

空間構成については各階ごとに回遊性のあるエリアと回遊性のないエリアを対象に、道型パブリックスペースについては、各エリアの最大幅員、最小幅員を図上で計測し、平均幅員を算出した。広場型パブリックスペースについては、各エリアの最大面積、最小面積を図上で計測し、平均面積を算出した。また、各エリアのパブリックスペース1,000㎡あたりの着座施設の箇所数と各エリアのパブリックスペースの面積に対する各種別の修景スペースの割合をそれぞれ算出した。

表-1 は道型パブリックスペースの幅員及び広場型パブリックスペースの面積を示している。道型パブリックスペースの平均幅員は3地区とも4mと差はないが、広場型パブリックスペースの平均面積、最大面積はグランフロント大阪地区が他の2地区と比べて圧倒的に大きくなっており、開発年代を経るごとに広場型パブリックスペースの規模が拡大していることが分かる。

表-2 はパブリックスペース内の着座施設数を示している。パブリックスペース1,000㎡あたりの着座施設の設置数は、大阪駅前ビル地区は道型に設置されておらず、広場型に0.4箇所、オオサカガーデンシティ地区は道型に0.9箇所、広場型に6.0箇所、グランフロント大阪地区は道型に5.5箇所、広場型に5.0箇所となり、大阪駅前ビル地区の着座施設数が他の2地区と比べて圧倒的に少ない。また、着座施設が一定設置されている2地区では、広場型を中心に設置されていることが分かる。回遊性のあるパブリックスペースと回遊性のないパブリックスペースでの着座施設数を比べると、道型と広場型ともに回遊性のないパブリックスペースの設置数の方が多くなることが分かる。

表-3 はパブリックスペース内の修景スペースの割合を示している。パブリックスペースに含まれる修景スペースの割合を見ると、大阪駅前ビル地区は道型が3.4%、広場型が16.2%と低いのにに対し、オオサカガーデンシティ地区は道型が14.3%、広場型が28.9%、グランフロント大阪地区は道型が11.2%、広場型が37.1%と後の2地区では修景スペースの割合が増加している。また修景スペースの種類をみると、大阪駅前ビル地区では緑系と水系のみで施設系は存在せず、オオサカガーデンシティ地区では緑系と水系に加えて施設系が存在するが、緑系が大半を占めている。グランフロント大阪地区では緑系・水系・施設系が存在するが、他の2地区と比べ、水系および施設系の割合が増加している。回遊性のある道型・広場型パブリックスペースに含まれる修景スペースを見ると、大阪駅前ビル地区は道型が3.8%、広場型が8.1%、オオサカガーデンシティ地区の道型が16.9%、広場型が28.2%、グランフロント大阪地区の道型が17.5%、広場型が34.4%と開発年代が新しくな

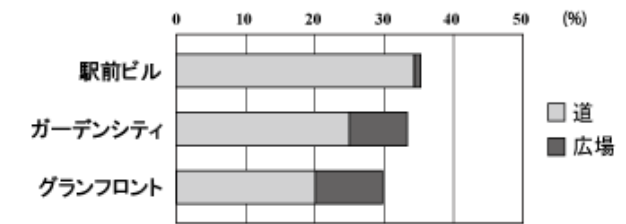


図-2 総床面積に占めるパブリックスペースの割合 (道型・広場型)

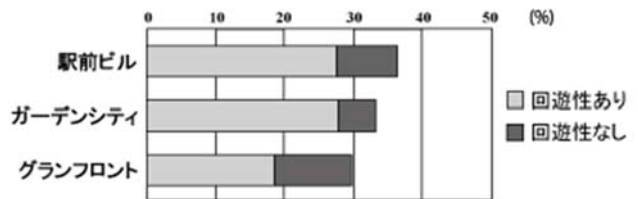


図-3 総床面積に占めるパブリックスペースの割合 (回遊性あり・回遊性なし)

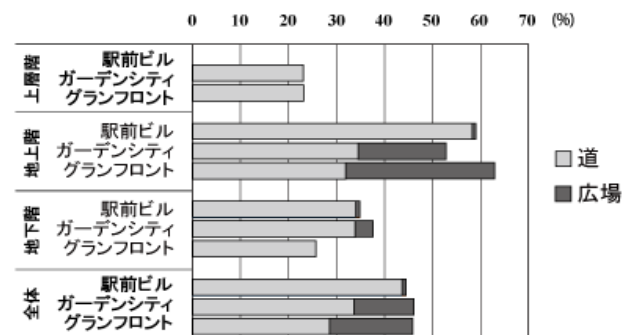


図-4 回遊性のあるパブリックスペースの割合

表-1 道型パブリックスペースの幅員及び広場型パブリックスペースの面積

		最大	最小	平均
道型 (幅員m)	大阪駅前ビル地区	30	1	4
	オオサカガーデンシティ地区	27	1	4
	グランフロント大阪地区	36	1	4
広場型 (面積㎡)	大阪駅前ビル地区	933	152	438
	オオサカガーデンシティ地区	3981	109	848
	グランフロント大阪地区	6660	44	2165

表-2 パブリックスペース内の着座施設数

		回遊性		全体
		あり	なし	計
		計	計	計
道型	大阪駅前ビル地区	0.0	0.0	0.0
	オオサカガーデンシティ地区	0.6	2.4	0.9
	グランフロント大阪地区	2.8	9.2	5.5
広場型	大阪駅前ビル地区	0.0	0.5	0.4
	オオサカガーデンシティ地区	5.7	8.5	6.0
	グランフロント大阪地区	4.1	7.3	5.0

表-3 パブリックスペース内の修景スペースの割合

(%)

		回遊性あり				回遊性なし				全体			
		緑系	水系	施設系	計	緑系	水系	施設系	計	緑系	水系	施設系	計
道型	大阪駅前ビル地区	3.6	0.2	0.0	3.8	2.3	0.0	0.0	2.3	3.3	0.2	0.0	3.4
	オオサカガーデンシティ地区	14.4	1.5	1.0	16.9	0.4	0.4	1.1	1.8	12.0	1.3	1.0	14.3
	グランフロント大阪地区	8.7	7.6	1.2	17.5	1.1	0.0	1.5	2.6	5.4	4.4	1.4	11.2
広場型	大阪駅前ビル地区	0.0	8.1	0.0	8.1	18.7	0.0	0.0	18.7	14.3	1.9	0.0	16.2
	オオサカガーデンシティ地区	19.2	8.6	0.4	28.2	35.1	0.0	0.0	35.1	20.7	7.7	0.4	28.9
	グランフロント大阪地区	15.4	17.1	1.8	34.4	42.7	0.0	1.6	44.3	23.0	12.4	1.8	37.1

るにつれて増加している。回遊性のないパブリックスペースに含まれる修景スペースの割合は、大阪駅前ビル地区の道型が 2.3%、広場型が 18.7%、オオサカガーデンシティ地区の道型が 1.8%、広場型が 35.1%、グランフロント大阪地区の道型が 2.6%、広場型が 44.3%となり、道型に含まれる修景スペースは3地区とも極端に少なく、広場型では開発年代を経るごとに増加していることが分かる。

#### 4. 大阪都心部における開発年代の異なるパブリックスペースの空間特性と今後のあり方

本研究により明らかとなった、大阪都心部におけるパブリックスペースの変容についてまとめ、今後の都心部におけるパブリックスペースのあり方について述べる。

大阪都心部における各地区の総床面積に占めるパブリックスペースの割合は、開発年代を経るごとにやや減少するものの、そのうち広場型の割合は、徐々に増加する傾向にあることが分かった。また、回遊性に注目すると、回遊性のあるパブリックスペースは3地区とも地上階で最も充実しており、いずれもフロア総床面積の50%以上を占めていた。そのうち広場型の割合は大阪駅前ビル地区ではわずかなのに対して、オオサカガーデンシティ地区以降の2地区では広場型の割合が急増していた。また地上階での回遊性に加えて、回遊性のあるパブリックスペースが上層階でも見られるようになり、多層化が図られていることが分かった。回遊性のあるパブリックスペースに含まれる修景スペースは、道型に比べて広場型で割合が高くなっており、さらに開発年代を経るごとに増加していることが分かった。着座施設についても3地区ともに広場型を中心に設置されており、オオサカガーデンシティ地区とグランフロント大阪地区では着座施設が充実していた。以上のことから、都市の賑わいや魅力性の向上のためには、回遊性のあるパブリックスペースを地上階を中心に多層階で確保していくことが重要であると考えられる。特に滞留行動を誘発する広場型パブリックスペースの整備に重点を置き、修景スペースや着座施設を充実させることが重要である。

#### 参考文献

- 1) 大阪府府民文化部都市魅力創造局、大阪市ゆとりとみどり振興局：「大阪都市魅力創造戦略」

- 2) 鳴海邦碩 (2009)：「都市の自由空間—街路から広がるまちづくり」学芸出版社 3p
- 3) 三浦彩子・金子晋也・是永美樹・八木幸二 (2008)：「都市における商業施設の公開スペースの構成」, 日本建築学会計画系論文集 pp.573-578
- 4) 土田寛・積田洋 (2005)：「休憩および待ち合わせ行為に関する嗜好空間の分析—都市のパブリックスペースの研究—」, 日本建築学会計画系論文集 pp.59-66
- 5) 「PROJECT FOR PUBLIC SPACES」：  
<<http://www.pps.org/reference/jjacobs-2/>> (2015/02/14 アクセス)
- 6) 長聡子・出口敦 (2005)：「都心部における施設内休憩施設空間群の配置構成と利用に関する研究—福岡県天神地区の分析—」, 日本建築学会土地計画系論文集 pp.123-129
- 7) 山貫崇之・澤木昌典・鳴海邦碩 (2000)：「民間企業が提供するパブリックスペースの分布状況と利用実態に関する研究—大阪市梅田周辺地区を事例に—」, 日本都市計画学会学術研究論文集 pp.1069-1074
- 8) 高山幸太郎他 (2002)：「商業集積地における空間の「奥行」に関する研究—下北沢を事例として—」, 日本都市計画学会学術研究論文集 pp.79-84
- 9) 荒屋亮他 (2005)：「スペースシンタックス理論に基づく市街地オープンスペースの特性評価」, 日本建築学会計画系論文集 pp.153-160
- 10) 金俊豪他 (2007)：「商店街における休憩スペースの空間構成と利用評価に関する研究」, 日本建築学会計画系論文集 pp.75-82
- 11) 大阪市都市整備局 (1985)：「大阪駅前市街地改造事業誌」
- 12) オオサカガーデンシティ：  
<<http://www.osaka-gardencity.jp/>> (2015/02/01 アクセス)